

## グローバル・カフェ 留学報告イベント(国立政治大学&ブルネイ・ダルサラーム大学) を開催しました

2025年1月23日、留学報告イベントを実施しました。2023年9月～2024年6月まで、本学の[ネクストプログラム](#)（グローバル人材育成プログラムの中国語コース）で国立政治大学（以下、NCCU）に留学した永野瑞季さんと黒川翔矢さん、2024年7月～2024年12月まで[本学交換留学制度 EXPLORE](#)を利用して、ブルネイ・ダルサラーム大学(以下、UBD)へ留学した福岡翼さんが、現地での授業の様子や生活などを紹介しました。日本人学生6名、教職員4名の計10名が参加しました。



NCCUに留学した永野さんは、その目的について、中国語の向上と台湾の法律を学ぶことと述べました。NCCUには留学生1人（または2人）に、現地の学生が1人つき、留学生をサポートしてくれる「バディプログラム」という制度があり、台湾に到着した際、バディが空港まで迎えに来てくれたり、生活面で困ったことなどがあれば何でも相談に乗ってくれたと話しました。現地の授業(1コマ50分間)では、飲食が可能だったようで、特に午前中の授業中では多くの学生が朝食を食べながら受講していることに驚いたそうです。台湾の法律は日本のものと類似しているが、完全に同じではないと述べ、現地で履修した「刑法」「法制史」「労働法」では、日本と台湾の法律との比較しながら学べた、NCCUの教員たちは質問すると、授業後でも丁寧に解説してくれるなど授業にはとても満足していると話しました。

また、台湾の魅力の一つに「多様性」を挙げ、アジアで唯一同性結婚が合法的に認められている地域であることから、当事者は同性愛者や両性愛者であることを隠すことはなかったと続け、現地で出会った人々は皆、個々の性格を尊重し、少数派にとっても理解があるといった印象を受けたと話しました。多様性と寛容性を併せ持つ台湾の人々に囲まれて生活するうちに、永野さん自身の長所や短所等の個性をより深く知ることができたと語ってくれました。

同じくNCCUへ留学した黒川さんは、留学前に猛勉強をした甲斐あって、留学に有利となるHSK(中国政府公認の中国語検定)4級を取得、予定より時期を早めての渡航が実現したと話しました。現地で受講した中国語授業「Intensive Mandarin course」では、5段階にレベルが分けられており(レベル5が最高レベル)、黒川さんは留学前のレベルチェックテストでレベル3のクラスに入ることが決まっていたそうです。しかし、現地で実施した最終レベルチェック(口頭試験)で、思うように答えられず、同夜にレベル2へ降格するというメールが届き、留学初日に早くも挫折を味わったと語りました。「このままではいけない!」と奮起した黒川さんは、苦手だったグループディスカッションでも積極的に発言したり、現地学生と一緒にサークル活動にも参加し、



日々中国語を浴びる環境に身を置いたそうです。その結果、二学期に実施したレベル分けテストでは、レベル3から飛び級してレベル5に入ることができ、この頃から中国語でコミュニケーションができる楽しさを実感できるようになったそうです。



NCCUには広い図書館、ジム施設が充実していて、特に24時間使用可能な自習室はとても重宝した、ぜひ香川大学にも設置して欲しい！と話しました。大学のサークル活動については、とても活発で、運動系、文科系問わず様々なものがあつたとのことで、何か新しいことに挑戦したかった黒川さんは、現地でできた友人と人生初のハーフマラソン大会に出場、さらに仲良くなった友人たちから、地元民しか知らない穴場的な飯屋も紹介してもら

えたと話し、もし留学するなら、現地のサークル活動にも参加するべき！と勧めました。

福岡さんは UBD への留学目的を、異なる文化圏での生活および交流を経験すること、特に宗教・慣習・統治体制等について学ぶこと、また UBD での授業は英語で行われるので、英語能力の向上を図ることであったと話しました。現地では「International study」「Indus valley civilization」「Geographical realities」

「Elementary Malay」を履修、1 コマの授業形式は Lecture(110 分)+Tutorial(50-60 分)で構成されていたそうです。課題には、個々が提出するエッセイやプレゼンテーションのほか、チームプレゼンテーションがあり、UBD 学生と活発な意見交換をした、発言をしないと出席にならないため、常に何を発言しようかを考える必要があったと述べました。また、Tutorial は講義内容や課題について、先生やクラスメートから詳しくアドバイスをもらえる貴重な時間で、この時間をいかに有効に使うかが重要であったと付け加えました。



ブルネイでは国教であるイスラム教の影響が社会に深く根付いており、クルアーン（イスラム教の聖典）の教えが日常生活に反映されていたと話しました。食文化においては、ハラールフード以外のレストランを見つける方が難しいことや、モスクを訪れる際には服装に注意する必要がある、男女ともに肌の露出は避けるべきとされていること、日々の生活の中でお祈りの時間が定められていることなどが印象的だったと語りました。寮生活では、自分の「当たり前」が通用しないことを痛感したと話し、深夜に大音

量で音楽を流す他国の留学生がいたり、2日間水が出ない状況にも直面したとのこと。トラブルが起こった際には、相手の意見を尊重しながらも自分の意思をしっかりと伝えることで、乗り越えた、多くの壁にぶつかったものの、そのすべてが貴重な経験となり、留学に挑戦して本当に良かったと振り返りました。



### ③ 寮での共同生活

- ◆寮 (The Core) の施設  
食堂、小コンビニ、コインランドリー、ATM、アイス屋
- ◆ルームメイト  
パキスタン人、イラン人、ブルネイ人
- ◆ちょっとしたトラブル
  - ・Water crisis
  - ・止まらない音楽と電話